

## 教材の本質をふまえた体育指導のあり方

### ～ゲーム・ボール運動を通して～

#### I 研究の内容

##### 1 研究の具体的内容

- (1) 「ゲーム・ボール運動（ゴール型・ネット型・ベースボール型）」において、わかって・できる楽しさ、喜びを味わうことのできる授業づくりについて研究を深める。
- (2) 技能を高めるための効果的な言語活動（学習資料や学習カードなどを含めて）について研究する。
- (3) 授業案をもとに授業実践を行う。その成果と課題について話し合い、今後の授業や研究に活かしていく。
- (4) 「ゲーム・ボール運動（ゴール型・ネット型・ベースボール型）」の2年目として、理論研究や実技研修を行う。

##### 2 授業研究

1年生	「ボンバーゲーム」	(ゲーム)	梶原美奈子	教諭	塩山南小
6年生	「ハンドボール」	(ゴール型)	鈴木 陸人	教諭	日下部小

##### (1) 授業実践から学んだこと

- ・児童の実態を的確に把握し、それに応じた手立てを講じることにより、心と体を一体としてとらえた授業が実践される。
- ・授業者が、今まで実践されたことがない、または実践が少ない内容を扱ってくれたため、用具の大きさや素材について、丁寧に検討することができた。
- ・学年や発達段階に合わせて、場や用具、ルールを工夫することで、児童の意欲や動きが大きく変わることがわかった。
- ・単元を通して基本的な技能を身につけるための時間が設定されており、ポイントを押さえた指導で、ゲームに生かすことができる技術を習得していた。
- ・1年生「ボンバーゲーム」の実践からは、小学校のスタート段階でボール運動をいかに楽しいと思わせるかが重要であるということに気づいた。
- ・6年生「ハンドボール」の実践からは、運動量を確保することや、苦手な児童も一緒に楽しめるような手立てを講じることなど、体育学習の本質に触れられた。
- ・体育の学習では、教材選択の意義や、その運動で身につけさせたい動きなどを明確にして授業に臨むことが大切だということ。

(2) 授業実践から、今後さらに研究を深めたいこと

- ・教材の本質や運動の特性については、今後もさらに研究を積み重ねていきたい。
- ・体育の学習における効果的な言語活動とはいかなるものか。
- ・運動量を確保した授業実践について研究を深めたい。
- ・新学習指導要領の全面実施にあたり、「ゲーム・ボール運動」の領域だけでなく、広く授業実践を積んでいきたい。
- ・業前、業間や放課後など、隙間の時間を体育の学習に生かしていくにはどうすればよいか。
- ・投能力の低下という全国的な課題に対して、どのような手立てを講じることが効果的か。

## II 成果と課題

### 1 成果

- ・昨年度のネット型の研究実践を生かして今年度の授業提案がなされたため、ボール運動の系統性について深めることができた。
- ・「ゲーム・ボール運動」という広い領域に設定したことにより、授業者の思いを大切にした研究授業が行われた。
- ・1年生と6年生の授業を参観することができ、小学校のスタートとゴールをイメージすることができた。
- ・どちらの授業実践も投の運動につながる内容であり、現代の子どもたちが課題とする部分に大きな可能性を示していた。
- ・1年生においては作戦ボードを、6年生においてはタブレットや付箋紙などを用いて効果的な言語活動が行われていた。
- ・夏季学習会の折、実技研修を行ったことにより、授業研究の前に部会の全員で共通理解を図ることができた。
- ・「教材の本質」という普遍のテーマについては引き続き追い求めつつ、変化の激しい時代の中で流行にも敏感になっていく必要がある。

### 2 課題

- ・自分のチームの特徴と相手チームの特徴をとらえて、児童が主体的に作戦を立てたり話し合ったりすることができるようになるには、どうしたらよいか。
- ・タブレットや作戦ボード、学習カードなどを用いて効果的な言語活動を仕組むにはどうしたらよいか。
- ・未だ授業実践がない「ベースボール型」や「(陣地を取り合う) ゴール型」の運動についても研究したい。

(部長 小野 敬久)